

令和七年夏号（2025年）

あたらしい道



【先祖と道】

第543号



“自分の先祖さんが  
見ているだらうなあ”と

こういつう風に

お思いに

なかりせんかって  
ね

松本孝恒女史語録より

# あたらしい道

令和七年 夏 543号

## 目次

テーマ「先祖と道」

ことのは

先祖さんが見ている……………1

お言葉に  
寄せて

ご先祖と道……………6

明日に  
向かって

思いを送る……………8

日本の国柄

能楽……………11

この道  
とおる

六人分の夕食代……………14

東京 佐瀬康志

編集部

大阪 尾崎 勲

大阪 中野和典

日本の人柄 八田與一 ————— 編集部 …… 16

伝説とお行 救いの理 ————— 竹口十相 …… 19

大和撫子 黒髪と薙刀 中野竹子 ————— 神奈川 芹澤和彦 …… 25

随 想 頂いてこそ道 ————— 三重 伊藤美幸 …… 32

つれづれ 米節 (民謡) ————— 熊本 満崎安 …… 34

編集後記 …… 36

(表紙題字 松本草垣女史御親筆 とびら書 松下賀奈子さん)



夏空に広がる花火

ことのは

# 「先祖と道」

先祖さんが見ている

皆さん どうですか

〳自分の先祖さんが 見ているだろうなあ〳

とこういう風に お思ひになりますんかって ね

先祖さんが 見ていらっしやるんです

皆さん 宜しいか

お祖父さんに 見られている方も 沢山いらっしやいますよって

それでね 見られている先祖さんに 喜ばれているお方とね

〳とんでもない〳って言われているお方と ありますんですよね

それ皆さんね

〳こんな事では〳先祖さんに どんな事いわれるだろうなあ

どう見られるだろうなあ〳 という事ね

ハツと ご自分ですぐに 気が付く筈でございますよって 宜しいか  
でね 皆さん方 先祖さんが見ていらっしやるとは  
今迄 ご存じなかったんですよね



### 先祖さんのご加勢は本当です

先祖さんは大したお喜びなんでしょうよ。それを本気で本気だと思っ  
ていらつしやたらね。ついご自分に加勢がありますよ。

憑り<sup>よ</sup>かかるんじゃない。加勢でございませうから。これを信じて下さいね。  
先祖さんが憑りかかってこられると云うと、一寸語弊<sup>ごへい</sup>があります。  
加勢なんですから。

但しフニヤ〜では加勢のしようがありませんね。  
シヤン〜していません。

加勢は出来ませんのね。わかりましたね。

そのご加勢は。例えばどういうご加勢か？ そりや。その時〜に  
応じてのご加勢ですからね。そりや。微妙なんですよ。

これを。そうかなあ。そういうことがあるのかなあ。お思いでしょうが  
大ありなんでしょう。ございますから。本気でお聞き下さいね。

亡くなった方を思い起こすと加勢がある

皆さんね ご自分らのご先祖さんを いつも仏壇で拜んでいらっしやいますわね

これはまあ習慣ですわね

それとは別にですわね 遠い先祖さん それからご自分らの馴染んでいる方とか 兄弟とか 奥さんとか そういう方で 亡くなっている方ごぞいますわね

そういう方々を時々思い出すんですよ 思い起こすんですよ

そうするとね 皆さんが何かの時に ヒョコっと思ひ出しますんですよ

〴〵久し振りにあの方のこと思っただな〴〵とね

そうしてですわね 又何かの時にですわね 相当な つまり覇気に皆さんがなるでしょう

その時に シヤッぱり こりや不思議だ こりや大したもんだなあ、とい  
うことを しみじみとお喜びになるだろうと思います  
それはね この道はね 地べただけでは 地上だけではね 自分だけでは  
これは知れとるんでございますって そういうふうの上の方から加勢して  
下さればこそでございます

(松本草垣女史語録より抄)



# ご先祖と道

大阪 尾崎 勲

あたらしい道のお行は、みたまと心が一つになる、即ち、みたま通りに成ることです。

そして、ご先祖さんと自分のみたまさんと、一つに成ることが大事なことです。そのご先祖さんの入り口において下さるのがお父さんであり、お母さんであります。

従って、お父さんを戴くことが、この道の基本となります。私達はご先祖さんなしには、この世に存在しないのです。

松本草垣女史から戴いたお言葉では、「お前さん達に、みたまさんを分かりやすく云いましょう」と、おっしゃって、

「人間のお肚の中に大きな木があつて、その根っこを想像しなさい。まず、大きな元根が、ございますね。これがみたまさんの芯であり本質です。

それから細根になる。これがご先祖さんですよ。その細根の先に白いひげ根があります。それがお前さん達の思いなんです」

一人ひとりの肚の中にご先祖さんがいる。これは不思議なことですが、本当なんです。そのご先祖さんは、必ずしも救われていないのです。前生そこで、作つた罪を背負つて苦しんでいるのです。そして、機会ある度に、子孫である私達に悟つて欲しい、と知らせてくるのです。それが身上（病氣）であつたり、事情であつたりすることがあるのです。

あたらしい道では、今申しました、お肚の中のご先祖さんと私達の思いを一つにして、「根」と申しておりますが、その根の部分をきれいに浄化するお行があります。これを「根を洗う」と云つ

ております。

根がきれいになりますと、お肚のご先祖さんは天上に上がっていくことになります。そして、一人ひとりのみたまを通して、ご加勢戴くのです。

私の「お仕込み(教示)」の中に、「あなたのご先祖さんが あなたのことを (心配しております) あんまり現実において 生きおおしている 正直者のお前さん ご先祖さんや皆さん方(天上におられる先祖さん以外の方々)が あなたのような正直者は 本気にならないで(なり過ぎないで) 天上では困っています どうしたらいいか 分からないから これを やり替えて下さい」と云われております。

私は田舎より大阪に出て、一生懸命、働いてきました。他人さんから後ろ指さされるようなことも記憶にはありません。四十年間まさに正直者として生きてまいりました。

しかし、こんなことは、人間として当たり前のこと、「人の道」であります。正直に生きることは、倫理道德の世界であります。みたまに添って素直に生きることが大切なのです。それを教えているのが、あたらしい道なのです。正直と素直は一字

違いですが、長い年月、間違いないよう、皆から変な噂を立てられないよう、正直に精一杯生きてきました。それはみたまさんの世界ではありません。

みたまさんに素直になり、喜んで本気になったら、こんな方が、というような、立派なご先祖さんが、身の内に嵌ってくれ、ご加勢もして戴けるのです。但し、本人がフニヤクでは加勢のしようがない、シャンクしてないと加勢は出来ません。

あたらしい道は、みたまと、ご先祖さんが一緒になつて働いてくれる場なのです。

これを「天地合体」と申します。

# 思いを送る

大阪 中野和典

どの人も、生身の体にいろいろな病が起こってくることは避けられません。

私はこれまで幾度となく、お医者さんの世話になっていきます。幸い、大病になったことはありませんが、眼のことでは、自分なりの通り道を歩かせて戴いています。

小学生の頃からの近視が、成人してもなお進行し、強度近視となつて、さらには眼底出血や白内障、網膜剥離はくりなどを経験しました。

若くして眼の変調をきたしたとき、私は、長男がまだ幼少でもあり、父母妻子を背負っていくべき自分の将来の健康について、不安な気持ちで一杯となっていました。

父親から、「自分の体は自分で大事にするように」とひとこと言われました。

その後、症状も落ち着いてきたある日、ふと出会った父の知人から、「あなたのお父さんが、あなたの眼のことを随分心配していたよ」と聞かされ、父に申し訳ないと思うとともに、父のぬくもさが体中に伝わってきたのでした。

また、入院や通院には、妻が家事、子育て、パートの仕事を持ち盛りしながら、良く支えてくれたのでした。このことは、妻ひとりだけでなく、妻の両親の有難さを分かせて戴くことになりました。

松本草垣女史は仰います。

「ものごとくに偶然はない すべて必然である 何事も我に見せられたるところの 天意と悟れば まんまるです」

私たちは、今あることや日常に起こる出来事は、前生で定まった因縁によるものと教えて戴いていきます。

自分には分からない前生で、様々な埃を積み、それが重なって業となつたそうです。前生で業をすべてきれいに出来ず、やり残したので、今生でやり直すために色々なことを仕向けられます。これが「因縁」と言われます。

私の眼に起こつたことは、自分の思いを改めるための因縁であつたと思つています。例えば、私はどうしても人のアラを見てしまいます。

草垣女史は、

「……アラを見るのは、自分の目が変わだから見えちゃうんですよって、自分どっかそういう点があるから……そう思つて自分を責めるんですよ……」

と、お諭しです。今生でも、知らず知らずのうちに自分の価値判断で人さんを評価し、良し悪しを決めつけてきたのです。まんまるではない自己中心の見方、ひずんだ思いをしてしまつているから、自分も持つているアラに気づかず、人のアラ

が見えるのです。自我というメガネを通して人を見てしまい、何事も素直に受け取ることができない厄介な癖とも言えます。とりもなおさず、人のアラは、人をして自分のアラを気づかされていることなのです。

今生でその思い方をきれいにしなくては、「生を受けて今生でやり直します」との先祖さんとの約束を果たすことができませんし、世直り国替えのお役にも立てません。

日々の思いを良い思いに変えていくことは、たやすいことではなく、不断の努力が必要です。その方法の一端を次のように教えて戴いています。

毎晩、寝むやす前に、みたまさん（自分が生かされている元）に、今日一日あつたことを振り返り、良くない思いをしたことを一つひとつ、「ごめんなさい」とお詫びをする。また、そのことを気づかせてもらい、今日も一日通らせてもらったことを、「有難うございました」とお礼を申し上げます。

先祖の窓口であるお父さんを思い、申し訳なかつたと気づかされたことをお詫びし、お父さんのお徳によつて今の自分があることを喜び、お礼を申し上げる。お父さんを通じて連綿と続くご先

祖さんに、その思いが届くと聞かせて戴いてい  
ます。

だから、妻のお父さんにも同様に、今の妻であ  
るのはお父さんお母さんが生み育てて戴いたお  
かげであることを喜び、至らなかつたことをお詫  
びし、今あることをお礼申し上げる。

このようにして、みたまさんと肉体の親と先  
祖さんに「お詫び」と「お礼」を申し上げること  
により、前生からの約束である因縁として起こつ  
てくることを「そうだ、そうだ」と受け止めるこ  
とができます。

そうすると、見せられたアラや起こつてきたつ  
らいことがあつても陰気にならずに、「これでい  
いんだ、結構だ」と前向きな思いを持つことがで  
き、天に、自分の至らなかつたところをお詫びし、  
それをわからせてもらつた有難い一日であつたこ  
とのお礼を申し上げて、その日の締めくくりをさ  
せて戴くことができます。

（本稿は、月刊誌『あたらしい道』平成二十八年  
十一月号掲載の記事に加筆、修正したものです。）



青 空

# 能 楽

## 編集部

### (一) 日本文化としての能楽

能楽は、日本の伝統芸能の一つであり、約七〇〇年の歴史を持つ舞台芸術である。

能楽は、主に「能」と「狂言」の二つの演目から成り立っており、「能」は厳粛で幻想的な世界観を持つ一方で、「狂言」は庶民的で滑稽な要素を含む喜劇的な作品が多い。

この能楽は、武士階級に愛され、室町時代には観阿弥・世阿弥親子によって大成された。

能楽は、日本文化において特異な位置を占めており、歌舞伎や文楽とは異なる静謐な美を持つ。西洋の演劇と比較すると、派手な演出を抑え、幽玄や余白の美を重視する点が特徴である。

能の演技は洗練された型に基づいており、音楽や舞踏、文学的要素が融合する芸術として、日本

文化の精神性を反映している。

本稿では、能楽の歴史的な成り立ち、代表的な作品について、そして、日本文化に与えた影響について簡潔に触れてみたい。

### (二) 能楽の成り立ちの歴史

能楽の起源は、奈良時代や平安時代にまで遡ることができる。当時、中国から伝わった散楽や田楽、猿楽といった芸能が日本各地で発展し、神仏への奉納として演じられた。特に猿楽は、後に能楽へと発展する基盤となった。

鎌倉時代になると、武士階級の台頭に伴い、猿楽が武士の嗜みとして受け入れられるようになった。そして、室町時代に入り、足利義満の庇護のもと、観阿弥・世阿弥親子が能楽を洗練させ、芸術的な完成度を高めた。

世阿弥は『風姿花伝』を著し、「幽玄」や「花」といった美学を体系化したことで、能楽は単なる娯楽ではなく、高度な芸術としての地位を確立した。

江戸時代には、能楽は武家社会の式楽とされ、幕府の公式行事や大名家の儀礼の場で演じられることが多くなった。一方で、庶民には歌舞伎や人形浄瑠璃の方が親しまれ、能楽は一部の特権階級のものとして存続することになる。

明治時代には西洋文化の流入により一時衰退したが、大正・昭和期には復興が進み、現在も日本の重要な伝統芸能として受け継がれている。二〇〇八年にはユネスコの無形文化遺産に登録され、国際的にもその価値が認められている。

### (三) 代表的な作品

能楽には二〇〇曲以上の演目があり、その中でも特に有名な作品として『高砂』『敦盛』『羽衣』『道成寺』などがある。

#### 『高砂』

『高砂』は、祝言の席などで演じられること

が多い演目で、長寿や夫婦和合を象徴する作品である。住吉明神と高砂の老夫婦が登場し、和歌を交えながら日本の神話的な世界観を表現する。

特に「高砂や この浦舟に 帆をあげて」の一節は、広く知られている。能の持つ静謐な美しさと祝祭性が見事に融合した作品であり、能楽の典型的な形式美を体現している。

#### 『敦盛』

『敦盛』は、平家物語に登場する平敦盛と熊谷直実の物語を基にしており、武士の悲哀を描いた作品である。

世阿弥によるこの作品は、死者の霊が登場する「夢幻能」の形式をとり、熊谷直実の悔悟の念が描かれる。

戦国武将・上杉謙信がこの能を好み、戦場で舞ったとされる逸話もある。武士の倫理観や無常観が強く表れた作品であり、能楽の精神性を象徴している。

#### 『羽衣』

『羽衣』は、天女と漁師の交流を描いた幻想的な作品であり、静かな舞と詩的な詞章が特

徴である。天女が羽衣をまとい、天に帰る場面は能楽の中でも特に美しいとされ、視覚的な美しさと象徴性が際立つ。

#### 『道成寺』

『道成寺』は、執念深い女の霊が蛇となり、鐘の中に逃げ込んだ僧を焼き殺すという激しいストーリーを持つ能である。

この作品は、他の能に比べて動きが激しく、狂気や情念を表現する点で異彩を放つ。後の歌舞伎や文楽にも影響を与えた重要な作品である。

#### (四) 日本文化に与えた影響

能楽は、日本文化の美意識や思想に大きな影響を与えた。

##### 一 日本の演劇文化への影響

能楽は、後の歌舞伎や文楽の成立に深く関与した。例えば、歌舞伎の演目の中には能楽を基にした作品が多くあり、舞台演出や演技様式にも能楽の影響が見られる。

また、狂言は後の落語や喜劇に通じる要素

を持ち、日本の笑いの文化の源流の一つとなった。

##### 二 日本の文学・芸術への影響

世阿弥の『風姿花伝』は、日本の美学を論じた最古の書物の一つとされ、「幽玄」や「花」という美学は、後の俳句や茶道、華道などにも影響を与えた。

松尾芭蕉や谷崎潤一郎の作品にも能楽の美意識が色濃く反映されている。

##### 三 日本人の精神性への影響

能楽の静寂や余白の美、無常観といった価値観は、日本人の精神文化に深く根付いている。

俳句や茶道などのように、簡素でありながら奥深さを求めていく日本人の精神性につながっている。

能楽は単なる古典芸能にとどまらず、日本文化と精神性の根幹を体現しており、現代においてもその意義を失うことなく受け継がれ、日本人に親しまれている。

# 六人分の夕食代

東京 佐瀬康志

先日、SNSを見てみると、レストランの店長が投稿した記事が目をついた。

六人連れの客が夕食を楽しみながら、最後の会計を済ませずに帰ってしまったという。

その店長は、「皆さんは、他の誰かが払ったと勘違いして帰ってしまったのだろう」と、良い思いで書いていた。

私は、その記事を読んで、「もし、私だったら、どうしただろうか」と、ふと考えた。

私たちは、「思いが大切」と教えられている。日々の出来事をどう受け止めるかによって、自

分の心のあり方も変わるし、それがやがて人生そのものを形作っていく。

同じ出来事が起こっても、それを良いものと捉えるか、悪いものと捉えるかで、その後の人生は大きく変わる。

日常の中で、私たちは小さきままな出来事に会う。私たちはそれをどう受け止めるだろうか。

たとえば、バスが遅れてイライラすることがある。しかし、その遅れによって事故に巻き込まれずに済んだのかもしれない。

仕事でミスをして落ち込むことがある。しかし、そのミスがあつたからこそ、大きな失敗を未然に

防ぐことができたのかもしれない。

「日頃の思いが大切」という言葉の意味を、この店長の話を通じて、改めて考えさせられた。

翌日、六人全員が揃って店を訪れ、申し訳なさそうに代金を支払った。

日々をいい思いで過ごすこと。それが、自分の心を豊かにし、ひいては人生そのものを豊かにしていくのだと、しみじみ感じた。

私もまた、日々の出来事をどう受け止めるかを大切にしながら、生きていきたいと思う。



# 八田 與一

—台湾の治水の父—

編集部

## 一・プロフィール

八田與一（一八八六年〜一九四二年）は、日本統治時代の台湾で活躍した土木技師であり、農業水利事業の発展に大きく貢献した人物である。

特に、嘉南平原の灌漑事業を成功させたことで知られ、彼が設計・建設した「烏山頭ダム」は、台湾の農業発展に多大な影響を与え、現在も多くの人々に感謝されている。



(Wikipedia より)

## 二・生涯

八田與一は、一八八六年（明治十九年）に石川県河北郡花園村（現在の金沢市）に生まれた。幼少期から優秀な成績を収め、東京帝国大学工科大学（現在の東京大学工学部）で土木工学を学んだ。卒業後、台湾総督府の土木技師として台湾に渡り、治水・灌漑事業に従事する。

当時の台湾は、日本統治の下で近代化が進められていたが、農業用水の不足が深刻な問題であった。特に嘉南平原は広大な農地を有する一方で、雨季と乾季の水量の差が激しく、安定した農業生産が困難だった。八田はこの問題を解決するため、大規模な灌漑事業を計画し、烏山頭ダムの建設に取り組んだ。

烏山頭ダムの建設は、一九二〇年に開始され、一〇年以上の歳月をかけて一九三〇年に完成した。このダムは、当時の日本国内でも前例のない規模であり、台湾の農業生産力を飛躍的に向上させた。特に、灌漑システムの完成によって嘉南平原は「台湾の穀倉地帯」となり、台湾経済の発展にも大きく寄与した。

しかし、一九四二年、太平洋戦争中に八田はフィリピンへ向かう船の上でアメリカ軍の潜水艦に攻撃され、命を落とした。享年五六歳。その死は台湾でも深く悼まれ、今もなお、彼の功績は語り継がれている。

### 三. エピソード

八田與一の人柄を表すエピソードとして、以下のような話が伝えられている。

#### 現場主義の精神

烏山頭ダムの建設に際し、八田は現場で働く労働者と同じ環境で寝泊まりし、共に汗を流した。彼はエンジンアでありながら、自らシャベルを持って作業することもあった。そのため、労働者

たちからの信頼が厚く、「八田さんのためなら頑張れる」と語る者も多かった。

#### 台湾の人々への配慮

当時の多くの日本人技師が、台湾の住民を「統治される側」として見ていたのに対し、八田は現地の人々と対等な関係を築こうとした。例えば、ダム建設の際には、台湾人の労働者たちにも積極的に技術を教え、現地の技術力向上に貢献した。彼のこうした姿勢は、台湾の人々に深く敬愛される理由の一つとなっている。

#### 家族への愛と覚悟

八田は戦争の影響でフィリピンへ向かうことになった際、自身の死を予感していたとも言われている。彼の妻である八田外代樹とよきは、終戦後の一九四五年に烏山頭ダムの放水路に身を投じ、夫の後を追った。このことも、八田與一の生き様と精神がいかに深く人々の心に刻まれていたかを物語っている。

#### 四、台湾のために尽くした義の精神

八田與一の人生は、まさに「義の精神」「利他の精神」に貫かれていた。彼は単なる土木技師ではなく、台湾の発展を心から願ひ、自己の利益や名声を求めることなく、人々のために尽くした。

#### 義の精神

八田の「義」の精神は、彼がどのような状況においても、信念を貫き通した点に表れている。彼は台湾総督府の命令に従って働くのではなく、自らの信念のもとに台湾の未来を考え、行動した。たとえば、烏山頭ダムの建設では、単なる日本の利益のためではなく、台湾の農民が持続可能な生活を送ることを第一に考えた。これは、単なる技術者ではなく、真のリーダーとしての姿勢を示している。

#### 八田の遺したもの

烏山頭ダムと嘉南大圳（灌漑施設）は、今なお台湾の農業の発展を支えている。その証として、台湾では現在も八田與一を敬愛する人々が多く、彼の銅像が建てられ、命日には地元の人々が花を

手向ける。日本統治時代の人物でありながら、台湾の歴史に深く刻まれ、今も「恩人」として尊敬され続けているのは、彼の無私精神が人々の心を打ったからに他ならない。

八田與一は、このように台湾のために生涯を捧げた偉大な技師であり、その精神は今なお多くの人々に語り継がれ、台湾と日本の歴史の架け橋となっている。八田與一の偉業は、これからも語り継がれていくだろう。

八田は台湾の発展を心から願ひ、自己の利益や名声を求めることなく、人々のために尽くした。その精神は今も台湾で敬愛されている。



伝説とお行

救いの理 (岩村城物語)

— 教えを實行 —

竹口十相

この作品は、道友向けです。婦人道友だった小濱よ志さんの弟君、保呂太一氏のご息女、友子さんの体験を、著者竹口氏がまとめられたものです。岐阜県の岩村は、小濱よ志さんの生まれ故郷です。(編集部)

○「思いの全てを道式になる」

昭和五十二年十二月二十日(火)

「ですから 今の今を どうです〜 さあお分  
かりでしょう こうゆう道があるから 是が非で  
も これが本当です」

(編集註 原稿の原文では、ご垂示は全文掲載されてはいますが、紙面の都合上、ここでは抜粋としました。改めて原文でお読み戴ければ幸いです)

「有り難い自分を 有り難い自分に〜 何だ〜  
こうゆう思いは とんでもないんですよ」

\*新しい道は 一切合切を 今の今をお分かり

「それならば 如何でしょう この道になって  
道に成り切って」

思いの全てを道式に

(思いの全てを道式に)

「新しい道は 何から何まで 一切合切を〜こ

「思いの全てを そうだ〜 何となく 道式に  
なるんです」

うゆう風に云っています」



【筆者注】

・「有難い自分を 有難い自分に」……常に、大自然から指図あり。過去は過去、今は今にしていく。今の苦に対して、わくものがあり、それによつて、燃られる。

・「救いの理を ほうくく」……理からなる法。ある天の理を通つたから、それをよしとして、救いの理を徳として、嵌めて頂く。それは人や、色々から上つ皮は気付く。入るのは息である。みたまさんが息として紫の間で、天網で頂いて肚に戻る。

だから、必要な時にふとわく。救いの理とは、相手さんの根を知らせること。目覚めさせること。

・「一人残らずが 信の信で 分るくく 今の今が」……これは冒頭の、今の今が分るに結ばれる。つまり、お示しの最後と最初が結ばれている。丸い。今の今が分るとは元の理が分るとゆうこと。

その元の理を分るために、今、見せられている、通らされているものがある。つまりは天からの指図である。

○岩村城と女城主の物語

★遠山景任修理夫人（女城主）

天正元年、武田信玄たけだしんげんに仕えた秋山信友あきやまのぶともは、城主遠山景任とよやまかげとうを亡くし未亡人となつていた修理婦人（女城主）が織田信長おだのぶながの五男御坊丸を養子として守つていた岩村城を攻撃。なかなか陥落しそうもないため、秋山は計を巡らし、密使を城中に送つた。「結婚して無事に城を明渡し、御坊丸を養子として家督を譲ることとしてはどうか」などと、ひそかに夫人を説得した。

夫人も、到底、最後まで城を守ることができな  
いと悟り、この提案を承諾。家臣や領民を守るこ  
との引き換えに政略結婚の道を選ぶこととした。

しかし、信友は信長の叔母と結婚したことを信  
玄に嫌われるのを悟り、御坊丸を甲府に人質とし  
て送つてしまった。御坊丸は七歳の時だった。

これを聞いた信長は大いに怒つたが、その頃は  
武田の勢いが強く、かつ近畿攻略に追われていた  
ので、そのまま放任せざるを得なかつた。しかし、  
信長は、岩村城を信友に奪われたのを無念とし、  
その周辺の小城に加勢を送り、ひそかに岩村城の

奪還の機をうかがうこととした。

### ★戦国時代 岩村城を攻略

天正三年三月、長篠の戦に武田勝頼たけだかつよりの軍が敗戦したことにより、武田と織田の勢力の均衡が逆転。信長はこの機を逸せず、同年六月、岩村城を攻略すべく嫡子信忠のぶただを大将とする軍勢を岩村城攻略に送り込んだ。信忠の大軍は数日間激しく攻め立てたが、岩村城兵も命を惜しまず防戦したため、容易に攻略はならず、信忠は戦法を変更し持久戦をとることとした。

六月から十月まで数ヶ月の時が経ったころ、さすがに城中も次第に兵糧が乏しくなり、兵卒も疲れを見せ始め、武田の応援も無くなり、ついに岩村城は陥落した。

信長は、秋山信友をはじめ修理婦人（御坊丸を人質としたことを憎まれていた）らを岩村城外の大將陣において、逆磔さかさはりつけにして殺害。この時、夫人は、声を上げて泣き悲しみ、「我れ女の弱さの為にかくなりしも、現在の叔母をかかると非道の処置をなすは、必ずや因果の報いを受けん」と絶叫しつつ果てたとゆう。信長が本能寺で殺される、

七年前の出来事だった。

### ★女城主の里（岩村城の女城主）

岐阜県の東南、日本のほぼ真ん中に位置し、自然豊かで歴史の足跡が色濃く残る恵那市。市街地から車で二十分の岩村町は、戦国の世に翻弄されながら必死に生きた、おんな城主の逸話が残りま

す。  
築城から八百年あまり、日本三大山城の一つで、日本百名城にも選ばれている岩村城は、織田信長の叔母にあたる、おんな城主おつやが善政を敷き、最後まで領民を守ったと伝えられていることから女城主の里と呼ばれています。彼女も愛したであろう恵那の山々と岩村のまち。ここには、古くから伝わる日本の美しさがあります。

（岩村町観光協会 八百余年の歴史の町のホームページより引用）

## ○深夜にラップ音がする

お礼を云って天上へ

かつて、小濱浩司氏は母よ志女と、母の弟の保呂太一氏とその娘の友子と、四人で母の郷里岐阜県の岩村を問う。

岩村は木曾山脈の南端、恵那山の西の麓にある町である。

四人は岩村の資料館を訪ね、岩村の歴史をあれこれと知らされた。この岩村には山城があり、織田信長の叔母が女城主となつた頃があつた。この女城主はいろいろな経緯から、信長の逆鱗に触れることになり、逆さ磔はりつけとなり焼き殺される。そういう事実を確認する。

岩村城は町から数百メートル上がった所に城跡が残っている。四人はここに上つて、かつての面影を忍ぶ。

すると、よ志女は、救いの理を實踐して、  
『ほうく、ほうく、ほうく……』  
と、実行した。

浩司氏はこれを不思議に思っていると、  
「お前さんたちには分るまいが、ちゃんと根の本

に書いてある」と、よ志女は云う。

その夜、一行の四人は岩村から北方五十キロにある下呂温泉に泊まつた。

深夜に寝ていると、ポンポンとゆう音を友子女が聞いて、

「伯母さん、これは何の音？」と尋ねる。

彼女は理工系の女性であり、上つ皮としては、心霊的なことには関心が薄い女性であつた。

「ラップ音つて云うんだよ。霊が来ているんだね」と、よ志女はあつさりと答えた。

更に、友子女は見えないものを見る。そして、びつくりして、よ志女に云つた。

「(昼、資料館で知つた)女城主や村人が出てきて、これでやつと私たちも天上に帰れるとお礼を云っている」と。

## ○神谷家のこと

よ志女の父は神谷なり。神谷家は代々岩村城のご典医なり。先祖の一人に神谷雲谷うんこくとゆう人あり。

彼は、蘭学・西洋医学を学ぶために長崎へ留学する。序に、カステラの製法を学び、美濃岩村に伝える。斯くの如く菓子屋の葉や村史に載つてい

る。

神谷は廃藩置県後に東京に出て、本所松坂（隅田川・吾妻橋の南）で開業する。

よ志女の父は長男であつたが、医業を継がずに、松井の家の婿となる。それ以前にも結婚して婿になるが、そこは縁が切れ、その後、松井となる。父は麻布で事業をする。

よ志女六歳のときに父は死ぬ。母、遺産を無くす。よ志女の兄弟は四人で、姉が二人あり、よ志女は三女である。弟は長男で太一とゆう。

父の死後すぐに、家の資産がなくなり、それぞれ養子・養女となる。よ志は千葉の野田に養女として過ごし、苦勞することになる。

### 【筆者の理解】

あたらしい道の天の理を以て、この出来事を頂くに、信長が天からの使いとして、あれこれする。色々な悲惨な出来事も当然あるが、おやかたさまの天の理をもって、過去の出来事を頂くと、起こったことは、矢つ張、一切合切が自らの因縁納消と悟り、喜ぶ。

こを吐く息として、掃除をする氣、喜ぶ氣が、

はつくくの音となり、息の理となり、救いの理が立つこととなる。日頃のよ志女のお行の賜物でありましょう。

相手のみたまさんの能きが出るお手伝いをするのが救いの理と思われる。産婆さんの役なり。

とりわけ、あたらしい道は高山おしなべ（高山おしなべる二世の指導者層に理解してもらう）を教え、実践する道である



岩村城（Wikipedia より）

大和撫子

——黒髪と薙刀——

# 中野竹子

神奈川 芹澤和彦



戊辰戦争は明治維新期の内乱で、新政府軍と旧幕府軍が戦った。鳥羽・伏見の戦いから始まり、五稜郭まで東日本の各所で争われた。その中でも「東北戦争」は磐城、白河口、二本松、会津の戦いの総称であるが、先ずその戦死者を多く出した藩等を見てみよう。

- 1、会津藩 三千十四人
  - 2、徳川家臣 千五百人
  - 3、仙台藩 千余人
  - 4、二本松藩 三百三十六人
  - 5、庄内藩 三百二十二
  - 6、長岡藩 三百十人
  - 7、米沢藩 三百余人
- これで分かる様に、戊辰戦争の悲劇は、会津藩に集中している。

何故そんな結果になったのか、その訳はいろいろあるが、その一つに藩祖である保科正之ほしなまさゆきが定めた「家訓十五条かきん」がある。正之は恐妻家の二代將軍秀忠が、たった一度の浮気から生まれた子なので、正妻（お江）に見つかれば、どうなるかわからない。そこで保科家の養子となって、ひっそり隠れてすごした。

三代將軍家光の世になってから、重用され、四代將軍の後見人になり、名君と言われるようになった。それ故に家光への恩義の思いが強く表示されたのが「家訓十五条」である。その第一条にあるのが、

他の藩を見て判断するな。もし徳川家に逆らう（会津）藩主がでたら、それは我が子孫でないから、家臣は決してそれに従ってはならない

というものであった。そして、この家訓は毎年一月十一日の御用始めと、八月一日、十二月十八日の御用納めに、藩士一同が打ち揃い、藩主が臨席の場で読み上げられた。これにより会津藩士としての生きざまが確定していたのだろう。どのような状況におかれても会津藩が「徳川家への忠誠」を貫き通すことが「藩是」であつたればこそ、いくら不利であつても戦い抜く会津藩の悲劇があつたのだ。奥羽越同盟を結びながらも、劣勢とみるや政府軍についた藩もあるなか、籠城までして、徹底抗戦したのである。

会津戦争という、まず思うのは「白虎隊」のことですが、これは日本人の誰もが知つていることと思ひます。続いて、これも胸のつまる国家老西郷頼母邸での、彼の母、妻、妹二人、娘五人、親族合わせて二十一人が一斉に自刃したことです。

ここでは詳しく触れませんが、妻の西郷千恵子の辞世は、感動の極みであります。

なよ竹の 風にまかする 身ながらも

たわまぬ節は ありとこそそぎけ

また、娘姉妹の二人が連歌の形をとつて詠んでいるのは、なんと表現していいかわからぬ佳作です。

手をとりて ともに行くなば まよはじよ(妹)  
いざたどらまし 死出の山道(姉)

妹は細布子(十三歳) 姉は瀑布子(十六歳)で、本当に若い生涯でした。

次はテレビドラマで、多くの人々に知られた、七連発スペンサー銃で薩摩兵を恐れさせた山本(新島)八重でしょう。その八重と共に知られている戦う女性が中野竹子であります。

竹子は弘化四年(一八四七年)江戸で生まれた。父は江戸常詰め<sup>ひょうな</sup>の会津藩士の中野平内<sup>ひょうない</sup>で、納戸掛の下級武士である。母は、こう子(幸子、孝子とも)といひ足利藩士、生沼喜内<sup>なまぬき</sup>の家臣である。竹子の下に弟豊記、妹優子がいる。

母のこう子は、なかなかの女傑で、江戸で会津藩上屋敷に住んでいたころ、隣り合う剣道場の旗本から狂歌一首が送られてきた。それには、

縁先に 五色の旗の そのにほひ

お芋でもなし 牛蒡でもなし

とあり、三人の子のおむつが沢山ほしてあつて臭いぞ、と伝えてきたのだ。それに対し孝子は、狂歌でもつて答えた。

明け暮れて やいとやいと 御稽古に

ひるねのやゝも 眼をさましけり

竹子は、わずか五歳にして「百人一首」を全て暗記してしまい、孝子が上の句を口ずさむと、竹子がすかさず下の句を答え間違ふことがなかった。竹子の才能に気づいた父平内は、さらに伸ばさうと、その教育を目付の赤間大助にゆだねることにする。彼は文武両道に秀れ、藩主容保の義姉照姫の薙刀なぎなたの指南役でもあった。竹子が毎日千回の素振りをし、薙刀の名手となるのは必然である。

赤間は薙刀ばかりでなく、四書五経、詩文、歌道を教えたが、どれにも秀でた才を見せる竹子に感嘆するばかりか、養子に欲しいと平内に頼み込んだ。赤間の養女となつた竹子は、ますます才能

を开花させていった。

それに加えて、竹子は実父が書の持明院流の師範でもあつたので、そちらの面にもたいへん秀れていたから、十七歳から十九歳にかけて、備中庭瀬藩主の板倉勝弘に乞われ、正室の奥右筆おくかうひつ（身分の高い人の側にいて書くことを司つた）をつとめた。こんなに若い奥右筆は全国諸藩のどこにもいなかったのではないか。

ところが、ここで義父の赤間大助が、藩論の「公武合体」と合わない「尊皇攘夷」を主張していたため、藩内にいることが難しいと、慶応元年秋に辞職してしまつた。そして、江戸を去つて若松城下北方の坂下ばんげの親族の離れに住むことになった。竹子も奥右筆を辞して赤間夫妻に同行したが、会津戊辰戦争の開戦前夜、突如何を思つたのか赤間家との養子縁組を解除してもらい、実家の中野家に戻つてしまつたのだ。

このことについて、竹子の妹優子（昭和六年まで生存）は、後にその理由を語っている。

「赤間先生は、姉（竹子）を甥の玉木某に嫁がせようとしたのですが、姉は一風変わったいわば男勝りのような性質なので、天下の形勢だとか、

奸賊跋扈だとか、君家の雪冤（無実の罪をすすぎきよめる）だとか、男のような義憤が姉の脳裏を支配していたと見え、縁談を非常に嫌い父に強要して離縁したように聞いています」

藩の存亡に係わる一大事に縁談などもつてのはかと思っていたのでしよう。竹子と妹の優子は藩でも有名な美人姉妹でした。藩主容保が京都守護職にあつた頃、会津藩江戸上屋敷では、こんな俗謡が歌われていた。

#### 会津名物業平式部なりひらしきぶ

小町はだしの中野の娘

会津藩の名物は「業平式部」と呼ばれるほどの美男の鈴木式部と小野小町のように美しい中野の姉妹だ、という意味である。才媛でもあり、美形でもある竹子が会津藩のため断固戦おうとしている様子がよく分かる。

八月二十三日母成峠を破つた新政府軍は、破竹の勢いで攻め込んできた。この危急の時、会津藩の女性を選んだ道は次の四つに分かれる。自刃、籠城、戦鬪、避難である。自刃の目的は、これか

ら籠城するにあたつて、足手まといにはならない、秤量米が不足するからとの思いがあつたからである。この日だけで自刃した女子は百数十名を越える。敢えて戦鬪に加わる、という女性はすくなかつた。それは当たり前のもので、会津藩の方針として、戦鬪では女性の助けをかりては武士の面目が立たない、というところにある。

ここで竹子の活躍の前後のできごとを整理して、その意義や背景を深めてみることにする。全て一八六八年のことである。

五月三日 奥羽列藩同盟が成立

七月二十九日 隣接の二本松藩落城、少年兵が

多く戦死する

八月二十一日 国境の母成峠が破られる。この

ころ竹子、優子、母断髪。

八月二十二日 藩主容保、白虎二番士中隊を従

え滝沢本陣へ出馬

八月二十三日 会津瀬、籠城戦を開始。竹子等

三人は照姫がいるという坂下へ行く

白虎二番士中隊、飯盛山で自刃

八月二十五日 中野竹子戦死

九月八日 明治と改元

九月十四日 新政府軍、会津若松城を総攻撃

九月二十二日 会津藩降伏、開城する

時の流れが分かったところで、中野竹子の奮戦振りを見てみましょう。

幕末の会津藩の有志の女性たちは、薙刀の同門や親類縁者などで、藩危急の場合は自分たちも武器をとって戦うことを誓いあっていた。二十人ばかりの団ができたが、それを統率するものがない、集団の名称もなかった。「娘子軍」と言うのは、後人がそう呼んだからである。

また、かねてより割場の早鐘がなったときは、直ちに城に入れ、と言われていた藩士の家族は、八月二十三日の朝、その鐘がなると急いで城に向かった。竹子も母と妹と共に急遽城へ向かう。このことあるを覚悟していたから、三人はすでに髪を短く切っていた。切った黒髪は庭先に埋め、義経袴を着け、白鉢巻に襷を掛け、一刀を腰に、そして得意の薙刀を小脇に抱え、覚悟の出立をした。最期の時が迫ったと知った会津の女性たちは、最も

良い衣装をまとったものが多かった。早鐘に急ぎにいそいだが、三人がかけつけたときは、すでに城門は閉ざされ、入場することはできなかった。

やむをえず、かねて決めてあった待ち合わせの場所の川原町へと雨の降る中を急いだ。そこで依田まき子(三十五歳)、その妹菊子(十八歳)、岡村すま子(三十歳か)に逢う。中野母娘と合わせ六人が集まった。後世いうところの娘子軍である。当初は武芸に秀れた女性が二十人余りが集まる予定でしたが、新政府軍の侵攻があまりに早く、思うようにいかなかったのでしょう。

これからどうしようかと思っているところへ、藩王容保の義姉照姫が坂下に避難しているとの情報があり、「照姫様を守護しよう」と言うことで出立する。到着してみると、それは誤報で照姫は城中に居るということだった。彼女たちの落胆は想像にあまりある。仕方なく、その夜は上町の法界寺の本堂に寝た。

翌二十四日、引き返して若松城に入ろうとするも散兵が多すぎて女性の小隊ではとても無理であった。

そのころ、越後方面から引き上げてきた家老の

菅野権兵衛の軍勢が、高久（会津若松市の北）にいた。そこで竹子たちは、この軍に加えてもらいたいと懇願するのだが、権兵衛は、

「会津の男は婦女子まで駆り集めて助けを乞うたとあざ笑われては悔しく、又、鉄砲の戦に薙刀では敵わない」

と言つて断る。すると竹子らは「敵わぬなら、ここで自害する」といつて食い下がるので、彼らもついに折れて「では、衝鋒隊に入りなさい」となり、共に戦うことになった。衝鋒隊というのは、旧幕臣の古谷佐久左衛門が率いた部隊で旧幕府の歩兵十一・十二連隊を主力として、会津だけでなく函館まで転戦した猛者の集まりであつた。

この部隊で戦つてもらえば、会津藩の面目も立つというのだが、彼女たちは、さぞ悔しい思ひであつたろう。

いよいよ出陣前夜、孝子と竹子の間で、とても考えられないびつくりする話があつた。六人の中で生き残つた水島菊子（旧姓依田）の回想である。

中野家の母娘は、いずれも容貌世にすぐれてうるわしくありましたが、特に妹の優子は世にも稀なる美人であつた。万一、敵兵に捕らわれたなら、

いかなる恥辱を受けてしまふか計り難く、と考えた孝子と竹子は、優子に聞かれぬように話し合つた。自分たちは間もなく死ぬのだから、優子は今夜のうちに自害させよう、という密談であつた。この二、三日の敵兵の民家を焼き払い、その財宝を奪い取り、その女子を強姦する様などを聞いていたので、優子のことが、ことさら心配になつたのも無理もない。

これをそばで聞いていた依田姉妹が跳び起き「あたら蓄の花を散らさんはいたはし」といさめたので計画は実行されずにすんだ。

翌二十五日、城を囲んでいる新政府軍を背後から打ち破り、決死の入城をこころみようとする。朝から衝鋒隊と共に、七日町に向い、ここから柳橋を渡り城に入ろうとしたが、そこには長州と大垣の兵が大勢いたのである。そこで戦端は開かれた。「抜刀して進撃」の声で、娘子隊も薙刀を奮つて突進する。敵兵は竹子たちに気がつく、「女だぞつ、生け捕れ」と迫つて来る。だが、娘子軍の薙刀さばきは秀れていて敵兵を斬りまくつた。しかし、新政府軍の銃器は秀れていて味方は敗色が濃くなつていく。

そんな中で、一発の銃弾が竹子の額(胸とも)に命中した。瀕死のなかで竹子が介錯を頼むが、母の孝子も二、三度と斬り下げるが、乱れた髪が首にからんで斬り落とすことができず、そのまま退却をするしかなかった。後に農兵の一人が竹子の首級に気づいて持ち帰り、法界寺に葬ったという(一説には、妹の優子が介錯した、とある)。竹子の薙刀には、辞世を書いた短冊が結び付けられていた。

武士の ものぶ 猛き心に くらぶれば

数にもいらぬ 我身ながらも

法号は美性院芳烈筆鏡小竹大姉である。

竹子の戦死後、母の孝子と優子は命危ない中をなんとか切り抜け、城内に入ることができた。前々から親しくしていた豊子(山川捨松の母)に逢い、竹子の戦死のことなどを話した。すると藩主容保のところへ連れていってくれた。容保は「女の身でありながら、よくぞ戦ってくれた」と褒め、菓子を与えた、という。

会津の善龍寺に「奈与竹の陣」がある。会津戦

争の女性殉難者の慰霊碑である。その二百三十八名の中に中野平内の娘として竹子の名も刻まれている。



奈与竹の碑 (Wikipedia より)

# 頂いてこそ道

三重 伊藤美幸

——令和六年十二月、六年ぶりに三重の伊藤美幸さんが場に戻られました。伊藤さんが以前書かれた原稿です——

秋も深まりつつあるようです。

自然は静かなるを以つて蘇ります。そして、静よく動を制す、と知るべきでしょう。いま一度、無心になつて、本当を尋ねてみませんか？ あたらしい道は、本当の事を教えて下さいます。

訳（因縁）あつて生まれ、天命（天意現成）に従い、素直に喜んで生かされてゆけば、因縁納消させて下さり、すべてを果たおほしたとき、天に呼び戻して下さいます。そして、天上で生き了す事になります。

そして、私達道友は、本物の「道のもん」に成るべく、毎日がお行と、そのように決められています。

今の私たちは、おやかたさまのお言葉が、すべて本当の事である、と信じて仰いでいます。ところが、おやかたさまを戴くということは、皆さん、いかがですか？

おやかたさまは、「今の世をせめて明治の御代のその頃に戻したい」そのように云つておられます。この事を常々、どう思われていますか？ そして、明治の日本人とは、どのように生きていたのか、己の身をもつて判りたいと、思った事がありますか？

これは、「己がそのように成つて生きてみたら」と云っているではありません。

おやかたさまの「せめて人をしてそのように生かしてやりたい」という切なる願い、親として子を思う、その心情を推し量る事が出来る私たちならば、何としてもその願い、叶えられないものかと思うのも又、人間としての情というものではありませんか。

そして、「まこと」を戴いている証しと思えます。本当を知らない世の中の人々が、今、どのように生きて行つたらいいのか判らない、お気の毒な状態でしょうか？

そして、私たちも、そんな世の中に「みたまさん」に生かされて生きるという本当を、そして、その喜びを知ってほしい、教えてあげたい、そんな思いを、天の子ですから持っています。

しかし、中々、手が出ない。何故でしょうか？ どうしてしまつたんでしょう？

その答えは唯一、日頃、私たちが未だ「みたまさん」にすべてを委ねる生活をしていない、知っていないながら、してないからです。知っていないながら任せる事が出来ていないからでしょう。

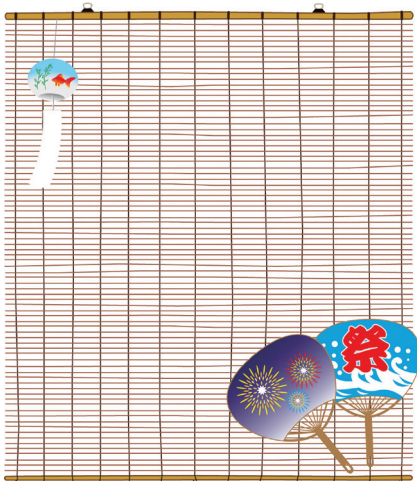
私たちには、いつまでも時間があるわけではありませんから、成つて来ることをせめて「よし」

として、通らせて戴く事、それによつて本当の理を身を持って分かせて戴くことが出来ます。

そして、人さんにも堂々と、「天の理を」伝える事が出来、火を灯す事もさせて戴けるようになるでしょう。

そして、そうなつてこそ「天を戴く」事に成つて行く、と思えます。

(平成28年6月27日)



# 米節 (民謡)

作詞 満崎 安

作曲・歌 岩本 征子

三味線 中村 亜紀

一. 日本根の国 瑞穂の国でヨ

いのちつないで 三千年

一粒万倍 秘めたる力

米を愛する 国柄よ

二. 米の一生 考えてみればヨ

八十八の 味がある

米は魂みたまの 栄養素

米が育てる 日本人

三.  
米には胚と たてすじありてヨ  
米の教えが 込めてある

人は素直で 筋目正しく  
明るく強く 生きよとて

四.  
お米を食べて 長生きしましょうヨ  
炊きたてご飯 おいしいな

生きるよろこび はじける力  
今日も元気だ がんばろう



## 編集後記

### 先祖と道

- 昔の人は死んで、遠くへ行くことはなく、その場に留まり、残された人々を守る役に着くと考えたようです。
- それが先祖で、守護霊のようなものでしょうか、見えないところで子や孫を助けてくれます。
- お墓も家の敷地内にあり、亡くなったお祖父さんもそのまま家族のように扱われました。
- 「お祖父さんに見られている」と感じることは、ごく当たり

前のことだったと考えられます。

- 民俗学者の柳田国男も、先祖は遠くへ行くのではなく、子孫とともに暮らしているという見解を持っています。
- またこれは、縄文時代から続く日本人の民族の原点である「家」につながってきます。
- 柳田国男は終戦間際に、日本人の民族性としてそれが消失してしまう危惧から、彼としては珍しく、憤然として筆を執ったと言います。著作の『先祖の話』には、彼の深い思いの世界があります。

### 大和撫子

○あまり知られていない、中野竹子の壮絶な戦いぶりには改めて驚かされます。

- 戊辰戦争の悲劇が会津藩に集中していた理由も、一つに藩祖の定めた家訓にあったと納得しました。

### お詫び 前号の訂正箇所

- 21頁上段10行目 (誤) 日本薬府 (正) 日本薬府
  - 24頁上段9行目 (誤) 渡部氏昇一紙 (正) 渡部昇一氏
- お詫びして訂正いたします。

季刊誌「あたらしい道」のご購読は

お申込みは、各支部毎にまとめて、左記にご連絡下さい。

(年4回、6月、9月、12月、3月の各月8日に発行。各発行月の前月15日までにお願い致します)

申込先

あたらしい道本部

電話番号 0729 (56) 7971

FAX 0729 (57) 5100

季刊誌「あたらしい道」 令和7年夏号

令和7年6月8日発行 (第543号)

発行責任者 中井 健

編集責任者 柳田 泰

発行所 一般財団法人 あたらしい道  
大阪府羽曳野市はびきの3-3-18  
〒583-0872 TEL: 0729 (56) 7971

印刷所 キクイ印刷工芸社  
大阪府羽曳野市古市6-12-9  
〒583-0852 TEL: 0729 (56) 6881





季刊誌「あたらしい道」

---

令和七年夏号

第543号

(2025年)

---

発行／一般財団法人あたらしい道